

## ポストモダン再考

菅野博史

### 0. はじめに

ポストモダン。この言葉を口にしたときの気まずさはいったい何だろう。それを取えて例えるなら、かつて流行した衣装に身を固めた自分の写真を、今の時点で冷静に振り返って眺めたときに感じる気まずさに似ているかもしれない。過ぎ去った昔の、あまり触れてほしくはない思い出。ポストモダンという言葉についてこうしたイメージを抱いているせいか、薄笑いを浮かべながら批判的にこの言葉を使ったり、自分自身が作った新しい概念を際立たせるためだけに、この言葉を使う人々ばかりが私には目につく。いま巷にあふれているのは、ポストモダンに対する否定的な物言いばかりといっても過言ではない。

そもそもポストモダンという言葉は、資本主義が高度に発達した国々において、一般の消費者が多様な商品をその社会的意味とともに消費するような、大衆消費社会を背景にして生み出された。それゆえ経済の、なかんずく消費社会の論理が他のすべての論理を圧倒し、さまざまな領域の思考様式に大きな影響を与えたという事実と、このポストモダンという概念を切り離して考えることはできない。しかしこのことは、特に日本において、ポストモダンなどというものはバブル経済のもとで咲いた徒花でしかなく、それゆえに過去の遺物として切り捨てられるべきだ、ととらえるような傾向をも生み出してきた。

バブル景気はとっくの昔に崩壊し、いまや世界はテロリズムという新たな政治的危機に直面している。ポストモダンなどという社会的段階は結局

は到来しなかったのであり、現在われわれが目にして居るのは、ポストモダン論者の主張を真向から裏切るような、モダン社会、それも残酷なモダンの論理が剥き出しになったような現実ではないか。こうしたアクチュアルな問いに答えることができないポストモダン概念は、今では全く力を失ってしまっているように見える。そしてポストモダン概念に影響を受けた人々もまた、ポストモダンなるものを文字通りモダンのあとに来る社会類型としてではなく、モダン社会内部の不可逆的な変化を示すキーワードとしてとらえ直すことでのみ、その概念的延命を図ろうとしている。しかも煮え切らないことには、密かにポストモダンという言葉を他の言葉に置き換えながら、である<sup>1)</sup>。

英語風にいえば「赤ん坊を風呂の水と一緒に流すことなく」、ポストモダン概念を社会学のなかでもう一度位置づけること。本稿で目指されているのは単純にこのことである。その場合、大きな展望を示すような理論的概略を求めることを優先して、個々のいわゆるポストモダン論者の議論に踏み込み、思想的な枝葉末節にこだわることは差し控えることにした。言葉を換えていえば、ここではポストモダンというラベルの貼られたおもちゃ箱から現在でも使えそうな道具を選び出し、社会学のおもちゃ箱へと移し替えるための方法を明らかにすること、そうしたささやかな社会学的な試みを行いたいのである。

## 1. ポストモダンの社会学的受容

ポストモダン概念を社会学のうちに取り入れようとする試みはいろいろと存在してきたが<sup>2)</sup>、現在でも自らの理論にポストモダンの看板を掲げ続けている論者は皆無に等しいように思える。それがなぜなのかを検討するためにも、最初に厚東洋輔によるポストモダン解釈を見ておくことにしたい。ポストモダンブームから時を経た現在の時点から、それを振り返るといって厚東のスタンスは、ポストモダンなるものを冷静に社会学的観点から概括することを可能にしているばかりでなく、ポストモダンに対して現在

広く見られる距離感をも、知らず識らずのうちに示しているからである。

厚東はまず、アーバンクロンビー等による社会学事典における、「ポストモダニズム」の項目を検討することから議論を始める。それによれば、ポストモダニズムの特性は次の6つであるとされる<sup>3)</sup>。

- ①パスティーシュ（混成）。根本的に異なったコンテキストや歴史時期に存在した様式の諸要素の張り合わせ。
- ②自省性。しばしば反語的な感覚を伴う自己意識性。
- ③相対主義。真理の客観的基準は存在しないという主張。
- ④結末に向けて整然と整えられた物語、あるいは真実を描こうとする表現性への抵抗。
- ⑤ジャンルや文化の区分を重視せず、境界を越えようとする意図。
- ⑥テキストの創始者である著者に対する信念の減退。

その上で厚東は、ここに述べた6つの特性のどれもが、「どこかで聞いた話」であり、「初めて聞かされた話とはほとんど感じられなかった」と述べている。というのも、これらの特性はすべて、明治以来の日本の「文明開化」の歴史に関して主張された、日本特殊性論のなかでたびたび論じられてきた諸特性と、ピッタリと重なり合っているからである<sup>4)</sup>。

つまり、厚東に従えば、ポストモダニズムの特性なるものは、明治維新以降における日本の近代化、すなわちモダニゼーションの過程において日常茶飯に見られた事柄の蒸し返しと解釈できるため、取り立てて言挙げされるほどの重要性はもっていないと判断されるのである。それどころか、多くの日本の知識人にとって、そうした特性は否定されるべき対象でしかなかったとさえいえるのである。そこから厚東は、西欧の論者たちが、あたかも新しい社会的段階であるかのように持て囃すポストモダンなるものは、日本においてはすでに過去において実現されたものでしかない、と結論づけることになる。

しかし、こうしたポストモダンの把握には、重大な問題がある。なぜなら、

この解釈に従うと、「明治維新以前を大ざっぱにプレモダンと概括すれば、そのあとに続くのは鹿鳴館に象徴されるポストモダンの状況」であるということになってしまい、「プレモダン→モダン→ポストモダンという進化図式を日本に直接当てはめることはできな<sup>5)</sup>」になってしまうからである。つまり、ポストモダンという社会的段階をモダンの後に含むような西欧の近代化論の枠組みでは、日本の近代化の過程を十分にとらえきれなくなるわけである。

こうした歴史認識はまた、ポストモダン思想が流行した80年代において、よりポジティブに日本は世界に先んじてポストモダンのである(あった)として、ナルシスティックに日本を称揚する議論を展開するための格好の題材となったものでもあった。東浩紀は書いている。

ポストモダン化とは、近代の後に来るものを意味する。しかし日本はそもそも十分に近代化されていない。それはいままで欠点だと見なされてきたが、世界史の段階が近代からポストモダンへと移行しつつある現在、むしろ利点に変わりつつある。十分に近代化されていないこの国は、逆にもっとも容易にポストモダン化されうるからだ。たとえば日本では、近代的な人間観が十分に浸透していないがゆえに、逆にポストモダンの主体の崩壊にも抵抗感なく適応することができる。そのようにして二一世紀の日本は、高い科学技術と爛熟した消費社会を享受する最先端の国家へと変貌を遂げるだろう……<sup>6)</sup>。

厚東のように日本におけるポストモダンの時期を明治期に認めようと、他の多くの論者が行ったように80年代の消費社会に認めようと、はたまた江戸期の文化にまで遡ってそれを確認しようと、日本が通常の近代化のコースから外れた特殊な国であると認識することには変わりがない。論者によって意見が分かれるのは、それをどう解釈するか、つまり大きいえばそれを肯定的に見るのか否定的に見るのか、という論点をめぐってなのである。このように日本におけるポストモダンの議論は、初めから様々な

色がつけられる傾向があったわけである。

現在では、日本社会は西欧流の近代社会を超えたポストモダン社会であるなどという言説を、臆面もなく弄することができる人はほとんどいない。それは何も、日本社会の他国に自慢できない現状が、そうした放言を許さないからというだけではない。それはまた時代が移り変わり、ポストモダンという言葉のもつコンnotationがネガティブなものに変化するにつれ、そしてその概念のもつ一面性が明らかになるにつれて、日本社会の特殊性を肯定的に見る意見が影を潜めてしまったからでもあるといえる。いわば同時代のリアリティがポストモダンという言葉で顕揚し、そしてまた凋落させたわけである。冒頭に述べたような、ポストモダンという言葉がもつ時代遅れの気恥ずかしさは、まさにここに由来するのだ。

繰り返せば、現在では、もうポストモダンというネガティブな言葉をそのままでは使えない状況があると広く認識されている。そこで厚東は近代化論の視点から、いわば西欧中心的な見方の産物であるポストモダン論ではなく、非西洋も含めた理論構成を必然的に伴うグローバリゼーション論のなかで、ポストモダン概念を見直すことを提案する。すなわち、「従来の近代化論では、「プレモダン」の残存としてネガティブに評価されるか、「ポストモダン」の先駆としてポジティブに評価する以外に位置づけようのなかった<sup>7)</sup>」日本文化の雑種性という事態を、ハイブリッドモダンと名づけることで新たにポストモダンを定義し直し、西欧流の時間軸だけで構成された近代化論ではなく、時間軸とともに空間軸を加えた伝播論的、文化接触的パースペクティブを、近代化論のうちに組み入れることを試みるのである。そしてこのとき、グローバリゼーションがとる一形式として、すなわち後発国が文化的接触の結果にとる社会の一類型として、ポストモダンをとらえ返すことができると考えるのである<sup>8)</sup>。ここで厚東によるこうしたハイブリッドモダンをめぐる議論の図式を示しておけば、図1のようになる<sup>9)</sup>。

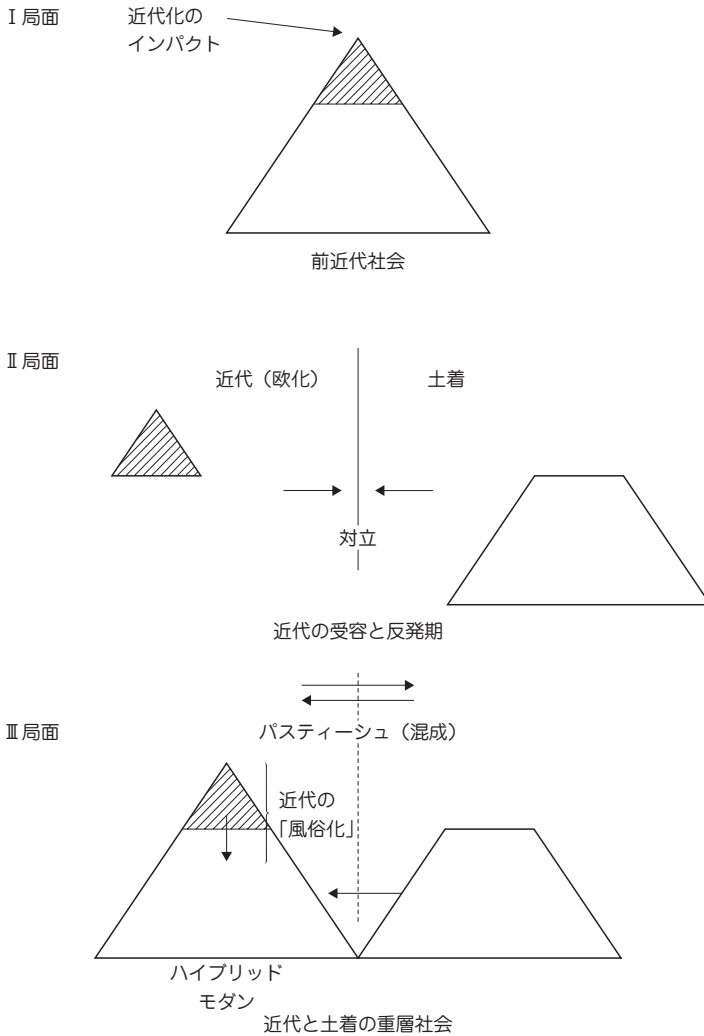


図1 ハイブリッドモダンの形成過程

こうして厚東によってポストモダン、近代化における一定の段階ではなく、日本において典型的に見られる近代化の一つの類型として、モダンの枠内でとらえられることになった。そしてこの厚東のアプローチ法には、

ポストモダン解釈をめぐる、いわば社会学的な問題解決のあり方といったものが、はっきりと表れている。なぜなら社会学的に見るときには、近代(モダン)の後に来る社会的段階としてポストモダンをとらえることは、二つの意味でリスクが高い試みであるため、避けられる傾向があるからである。

まずその一つめのリスクは、多くの人が納得のいく形で、モダンとポストモダンの社会的分水嶺を示さなければならないという点にある。もちろんモダンの定義にもよるのであるが、近代の枠組みを超えるような大きな社会的変化を、説得力をもって記述することは極めて難しい事柄であるため、しばしば(例えば、厚東のように)ポストモダンはモダンの一変種であるに過ぎないと断じることで、この問題にカタがつけられるのである。

そしてもう一つのリスクとは、その時々の実現によってポストモダンをめぐる理論が裏切られる可能性が極めて大きい、すなわち深く同時代の現実に切り込めば切り込むほど、理論のもつリアリティがすぐにその鮮度を失ってしまう傾向があるという点に存在する。新たな現実をポストモダン(実は名称は何でも良いのであるが)と言い立てながら、そうした現実がそもそも実現しないか、実現しても一過性のもので長続きしないで過ぎ去っていくときには、オオカミ少年の喩えよろしく、ポストモダンという言葉に対して人々は冷たい視線を送ることになるからである。

こうした観点から振り返るとき、80年代、消費社会がピークに達した日本のポストモダンの状況を褒めそやし、それを世界的に見て最先端の現象であると主張した、いわゆるポストモダン論が一時的な流行として時代の変化のなかで廃れていったのは、けだし当然であったといえる。論者の多くは社会変動をきっちりと論じることなく、その当時、時代の最先端であった、おもにフランスのポストモダン思想から引き出された概念を日本社会に当てはめただけにすぎなかったからであり、そうした現実の多くも、経済が停滞局面に入ると失われてしまったからである。

結局、厚東のように、あるいは今述べた社会学的な立場に立つことで、かつての時代的喧噪から距離を置き、冷静にポストモダン概念を振り返って見れば、それをモダンの後に来る社会類型としてとらえるリスクを取え

て冒し、もはや誰からも相手にされない悲喜劇を自ら演じる可能性を選択することはほとんどありえないことがわかる。しかしそれでは、ポストモダンを社会的段階としてとらえる見方は、完全に失効してしまったと言い切ってもよいのだろうか。

## 2. 管理のポストモダン

岡本裕一郎は、「世界的に流行したポストモダンも、九〇年代になるとすっかり後退して」しまい、「いまどき、「ポストモダン」などと口にすれば、時代遅れのオヤジ世代だと見なされてしまう<sup>10)</sup>」と実に率直に述べている。思想的な流行が過ぎ去り、それがかつてもっていたリアリティはすっかり失われてしまったというわけである。しかしこうしたことから、ポストモダン思想のもつ可能性までもがすべて失われてしまったと、果たして断言してよいのだろうか。これが岡本の根本的な問いである。

岡本によれば、現在においてリアリティが失われてしまったのは、ポストモダン思想の全体ではなく、「差異のポストモダン」という一部の思想的潮流であるとされる。より正確に言えば、この思想的潮流からリアリティが失われてしまったのではなく、この思想のもつ内実が現代のリアリティそのものに近づきすぎることによって自ら意味を失効してしまったのである。すなわち、「異質性や差異化を擁護」する一方で、「画一性や同一性を嫌悪」といった共通の傾向をもち、「差異の戯れ」に力点を置くようなポストモダンの思想的流れは、実際に多様性や差異化が実現されてしまった現代社会のうちでは現状追認の言説的効果しかもたなくなってしまう、それが目指した批判理論として機能しなくなったのである<sup>11)</sup>。

ここで一つ確認しておく、岡本はポストモダン思想に照応する現実が存在すると素朴に仮定した上で話を進めているので、「差異のポストモダン」社会とも呼ぶべきリアリティは現在すでに実現しているということが議論の前提になっている<sup>12)</sup>。そしてこうした社会では、大きな物語、すなわち揺るぎない現実が解体されることで生み出された、差異に基づく



相対的現実是否定されずに肯定され、その上で「差異の管理」が巧妙に行われるのだと主張されるのである<sup>13)</sup>。重要なことは、「[差異のポストモダン]の流行が終わった後、ポストモダンは消滅したわけ」ではなく、「むしろ、「管理のポストモダン」として私たちをしっかりと捕捉して」いるという岡本の認識であり、「ポストモダンな管理社会では、管理は自由を容認し、みずから組み込んでいる」ばかりでなく、「自由な「差異の戯れ」が肯定され、その上で差異が巧妙に管理される<sup>14)</sup>」という、社会的段階としてのポストモダン社会を積極的に認める岡本の基本的な立場である。

要するに岡本は、ポストモダン社会はその第二段階に達したと主張しているわけである。この「管理のポストモダン」の主張を現実<sup>15)</sup>に照らし合わせて見ると、9.11を契機としてセキュリティ確保の名の下で、新たな管理社会化が進行しているという、世界的傾向にそれは見合っていると考えられる。そしてポストモダン思想のいくつかの流れは、そうした管理社会化の流れに照準を合わせているのであり、いまだそのリアリティを失っていない(というよりも、いままさにリアリティを獲得しつつある)というのが、ポストモダンをめぐる岡本の主張の核心なのである。

それではポストモダン社会の第二段階、すなわち「管理のポストモダン」とは、いかなる社会のことなのであろうか。岡本に従って、一言でいってしまえば、それは通常対立する対概念と見なされる自由と管理が両立する、いわば自由管理社会のことである。例として貧困者、特にホームレスに対する現在の管理について考えてみよう。ホームレスたちは、強制的に施設に入所させられてそこで監視されるというよりも、「一日の行動や、その日の寝場所は自由であり」、「行動そのものが強制されることはない」という状況のなかで、「自由な行動を容認しつつ、その上で管理<sup>15)</sup>」されている。つまりフーコー流の身体を馴致する規律権力によって支配されているのではなく、新たな種類の権力、すなわち自由を認めつつ人々を管理するような権力によってコントロールされているのであり、まさにこうした状況こそが岡本のいう「管理のポストモダン」社会なのである。

監視カメラの偏在、コンピュータ・ネットワークの急速な発達、膨大な

情報を瞬時に検索できるデータベース・システムなどによって、一般の人々に匿名的で自由な行動を容認しつつ、状況によっては個人や集団を特定し彼らを管理するといったことが可能になってきた。実際、携帯電話の通話記録、防犯カメラの映像、道路に張り巡らされたNシステム等々、こうした管理に使用可能なものは現在、枚挙に暇がない。「管理のポストモダン」という岡本の議論が説得力をもつ所以である。

約めていえば、「管理のポストモダン」社会においては、人々を抑圧する規律や統制に基づく従来型の管理ではなく、差異の追求や自由な行動を容認する新しい形の管理が社会に浸透しているのである<sup>16)</sup>。そして、岡本によれば、この新たな管理を支える技法は、三つの技術からなっているとされる<sup>17)</sup>。つまり、あらかじめ可能な行動を制約する条件を設定する「コード化」、可能な行動のすべてをモニターする「監視」、そしてセキュリティ確保のため問題のある人物や集団を選別して除去する「排除」、がそれぞれである。これら三つの技法によって、「管理のポストモダン」社会、つまり自由と管理が並び立つ社会が実現されるというわけである。

安定した社会的基盤を失い、人々の不安感とセキュリティ確保の大義名分のもとに、あらかじめ設定された行動の範囲では行動の自由を認めつつつねに監視し、電子技術を用いながら巧妙に選別と排除の管理を行う、「管理のポストモダン」社会。たしかにそうした現実が存在することは多くの人々が認める事柄であろう。しかし問題は、岡本が主張するように、それが新しいポストモダン社会だということができるかどうかという点にある。

ここで一つの喩え話を持ちだしてみよう。かつて孫悟空はお釈迦様から頭に輪をはめられた。この輪は孫悟空の自由を奪うものであり、上の議論ではモダン社会の規律統制に相当する。その一方で、孫悟空がいくら自由に振る舞っても、それは結局、お釈迦様の手の内に留まったという話もある。そしてこれはポストモダン社会における自由管理の議論に対応する。ところでこの説話を敷衍して言えることは、お釈迦様がそれぞれの状況に応じて、これら二つのやり方を選択して使用できるということである。つまり、お釈迦様はどちらか一方のやり方をもっぱら使ったり、どちらかの

方が他方よりも優れていると考える必要はないのである。もしお釈迦様が、孫悟空を全く自由に振る舞わせても依然として彼は自分の手の内に留まるから何もしなくても大丈夫だと考えるならば、頭の輪は必要ないことになる。しかしそれよりもっと有効な管理方法は、お釈迦様が頭の輪で孫悟空の基本的な行動をコントロールした上で、必要な場合には自らの手のひらを示して孫悟空を自身に従わせることである。この喩え話の分析からわかることは、モダン社会の規律管理というものは、その有効性から現在においても実際に多用されており、自由管理にその場を譲ったわけではないばかりでなく、そもそも規律管理なしの自由管理など考えられない、ということではないかと思える。

翻って考えてみると、岡本が定式化した自由管理を支える三つの技法は一般的、普遍的な管理技術の手法でしかなく、モダン社会における規律統制型の権力でさえも、岡本のいうポストモダン社会型の権力より制約の大きいコード化と、より直接的な監視を伴う管理技法のタイプとして、この三技法の枠組みのうちで解釈が可能である。つまり岡本の議論自体に沿って考えても、自由管理による「管理のポストモダン」を、「規律のモダン」の発展系として論理的にとらえることができるのである。こうした見方をとるとき、岡本の議論はモダンとポストモダンの社会的な分水嶺を明確に論理的な形で提示できていないということになってしまい、ポストモダン社会論としては、かなり説得力を欠くものになる印象は否めなくなる。要するに、岡本が主張するような、ポストモダン思想のもつ独自のリアリティは認められるにしても、それが描き出している現実をポストモダンな存在として社会的に位置づけることには、かなりの無理があるように思えるのである。

### 3. 改めてポストモダンとは

ポストモダンをめぐる言説にはジレンマが存在する。同時代で新たに起こった社会的な事件や環境の変化に引きずられて、モダン社会を超えた社会類型を新たに提示すると、それが論理的にいったモダン社会の枠内にとど

まるものでしかない、あるいはモダン社会との違いが今ひとつはっきりしないものになってしまう、ということが一方ではしばしば起きる<sup>18)</sup>。他方で、モダン社会との違いを筋道立てて、明確に定式化してポストモダン社会(ポストモダン思想、ではない点に注意!)の類型を自分なりに提示すると、現実の社会そのものに裏切られる傾向が高くなってしまうのである。まさにポストモダンと口にすれば唇寒し、という状況である。

ポストモダンというものを、モダン社会のあとに続く社会的段階としてとらえ、そうした社会を具体的に説明しようとすればするほど、以上のジレンマは深まっていくように思える。それは基本的に「何でもあり」のモダン社会のなかでは、「新しいもの」がすべて既存のモダン社会のうちに呑み込まれてしまうばかりでなく、すぐにそれが「古いもの」に移り変わってしまうという独特の論理的性質によるように思われる。従って、ポストモダン社会のもつ新しい特質を描き出すことが、いつのまにかモダン社会の一面を描写する試みへと変質してしまうというわけである。

先に論じたポストモダンのリスクをめぐる社会学的観点を踏まえて、以上の議論を要約すれば、ポストモダンの社会的特質なるものを説明することは、論理的、経験的に極めてありそうにないということになるだろう。しかし、岡本の議論も含めて、ポストモダン社会論のなかで展開されている内容に見るべきものがないというわけでは全くない。事實はむしろその反対である。それでは、ポストモダン社会論を全否定することなく、その成果を取り入れていくためにはどうすればよいのだろうか。

一つの解決策は、ポストモダンという社会類型ではなく、そのメタレベルに位置するもの、具体的にいえば、主体のレベルに注目することである。もう一度、岡本の言葉から引用しよう。

プレモダンからモダンへの展開は「超越的な一つの色から多様な色へ」と表現できるが、この多様化を個人の内部でさらに展開したものがポストモダンだと考えられる。(中略)しかし他方、モダンとポストモダンが根本的に異なっている点も見逃してはならない。モダンは「十人十色」

といっても、一人一人にかんして見ると、「一人一色」なのである。たとえば、「黄色の人」はあくまでも黄色であって、それが赤色に変化することはない。モダンでは一人の色は、同じ色にとどまり続けるのだ（人格的同一性）。この点では、モダンはプレモダンと共通である。ところが、ポストモダンでは一人のなかで色が多様に変化する、と考えなければならない。自己が多様に変化し続けること、これがポストモダンの特質である<sup>19)</sup>。

自己なるものが多様化すると同時に、断片化し、その場の状況に応じて反省的に、別様の行為を行いうるような主体。これがポストモダン論者のいうポストモダンの主体の類型である。言い換えれば、人格なるものがすべての行動を基礎づける支柱の役割を失った、分裂した主体ということもできるだろう。ともあれ、どんな社会的形態のうちに位置づけられるにせよ、そうしたポストモダンの主体が支配的になるような社会、それがポストモダン論者のいう意味でのポストモダン社会なのだと考えることができる。

実際、消費社会において示差的な商品を購入行動を通じて追い求める消費者たちはこうした主体であると解釈できるし、岡本が主張する「管理のポストモダン」で自由に振る舞う主体たちも、その性格規定からいって、こうした主体類型に属することは明らかである。さらにいえば、厚東の議論でポストモダンに属するとされた、明治期の鹿鳴館時代における日本的な主体は、この意味でのポストモダンの主体概念とは相容れないため、そこでポストモダンをめぐる無用な概念的混乱が生じる余地もないことになる。こうしてポストモダンとはモダン社会から変化した主体のあり方を示す術語となり、新たな社会のあり方はそうした主体が登場する限りで問題となる、いわば背景の位置へと退くことになる<sup>20)</sup>。

ポストモダンを主体の問題としてとらえることで、すなわち社会を構成する個人の問題として、いわばメタレベルでそれをとらえることで、ポストモダンをめぐるいままでのジレンマは解消する。従って、ポストモダン

とは主体に関する概念であり、そうした主体が生み出した社会をポストモダン社会と呼べば事は済む、と最終的に考えればよいのだろうか。

誤解を恐れずにいえば、ポストモダンのな主体は、その定義からして、いつの時代にも存在していたと考えられる。この主体類型に見合う人々がいなければ、社会変動すら起こりえないからである。しかしもちろん、同時に非常に多くのポストモダンのな主体が大量発生したのは、現代という時において他には見られない現象である。またポストモダンのな主体が優位を占める社会は、今までにない新たな特性を備えた社会である可能性も高い。こうしたことを踏まえた上で、敢えて指摘すれば、主体のあり方が変化した社会をポストモダン社会と呼ぶかどうかは、主体とは別の次元に属する問題であるということになる。

主体のあり方が異なるからといって、社会の編成原理までが今までと相違するとは限らない。例えば、社会の側が自ら変動して、その枠組みのうちで自身の潜在力を表面化することで、ポストモダンのな主体という時代の変化に対応するというのも、大いに考えられるからである。従って、ポストモダンがポストモダンである所以、すなわち繰り返しになるが、社会的分水嶺の存在をいかにして確認するかということが、ポストモダンをめぐる議論においては極めて大切だということが改めて確認されるのである。こうしてわれわれの議論は振り出しに戻った。ポストモダンという感傷をはらんだ言葉に影響を受けることなく、ポストモダンの議論における社会的な連続性と不連続性を社会的に見極めていくこと、凡庸ではあるがこうした地道な努力がポストモダンの社会的な再考、そして再興のためには必要なだと確認して、ひとまずの結語に代えることにしたい。

## 補註

- 1) 例はいくらでも挙げられるが、例えばバウマンはポストモダンという言葉の使用をやめて、リキッド・モダニティとかライト・モダニティという言葉を使うようになっている。ジークムント・バウマン『リキッド・モダニティ』（森田典正訳）、大目書店、2001年などを参照。
- 2) ギデンズや今田高俊はその例である。
- 3) 厚東洋輔、『モダニティの社会学 ポストモダンからグローバリゼーションへ』、ミネルヴァ書房、2006年、二八頁。
- 4) 同掲書、同頁。
- 5) 同掲書、三〇頁。
- 6) 東浩紀、『動物化するポストモダン オタクから見た日本社会』、講談社現代新書、2001年、二八頁。
- 7) 厚東、同掲書、三六頁。
- 8) 同掲書、三五頁。
- 9) 同掲書、一六七頁。
- 10) 岡本裕一郎、『ポストモダンの思想的根拠』、ナカニシヤ出版、2005年、一五頁。
- 11) 同掲書、一五～一六頁。
- 12) 社会学的にいえば、当然ながら、この差異のポストモダン社会が社会構造上、どのようにモダン社会と異なる特性をもつのかといったことを論じなければ、ポストモダン社会の性格づけが十分になされたとは認められないことになる。
- 13) 同掲書、一九頁。
- 14) 同掲書、二〇頁。
- 15) 同掲書、六五頁。
- 16) 同掲書、二一一頁。
- 17) 同掲書、二一〇～二一二頁。
- 18) 今田高俊の機能から意味へというポストモダンの定義も、論理的に同じような問題を抱えている。詳しくは、今田高俊『モダンの脱構築—産業社会のゆくえ』、中公新書、1987年などを参照のこと。
- 19) 岡本、同掲書、一四頁。
- 20) 東のポストモダン解釈も、基本的にこうしたものである。彼の提示した「デー

「タベース的動物」というポストモダンの主体像については、東、前掲書、一三八～一四〇頁などを参照のこと。